

# 令和7年度 京都府 英語教育改善プラン

自分の思いや考えを自信をもって英語で発信（やり取り）できる児童の育成

○言語活動の割合 R5 92.2%→R7 100%

○CAN-DOリスト 公表 R5 35.9%→R7 100% 把握 R5 67.2%→R7 100%

## 目標

言語活動 指導と評価の一体化 教師の英語力・指導力 校種間連携 ALTの参画 ICTの活用 AIの活用 その他  
(パフォーマンステスト含む) (専科教員含む) (AIを除く)

### 1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①言語活動の割合  
R4 85.6%  
R5 92.2%  
6.6ポイント増加し、活動の頻度が向上した。
- ②学習到達目標の整備状況  
設定：R4 79.8%  
R5 80.8%

未だ改善が必要な点

- ①言語活動の割合  
割合は上昇しているが、目標の100%には到達していない。
- ②学習到達目標の公表・把握の割合については、減少した。  
公表：R4 40.4%  
R5 35.9%  
把握：R4 72.7%  
R5 67.2%

### 2. 要因分析

- ①多様な研修を通じて、効果的な言語活動の実施方法が共有され、授業改善に生かされた結果と考える。
- ②小・中学校の教員が研修の場を共にし、学校間での学習到達目標及び学習内容のつながりを明記したCAN-DOリストのねらいや指導の在り方について理解を深めたことにより、設定率が微増したと考える。
  - ①英語に対する苦手意識をもつ児童を取り残さないかという懸念が、言語活動を積極的に取り入れることへの障壁になっている可能性がある。
  - ②学習到達目標の達成をいっとう見るかという評価計画の作成が不十分であると考え。

### 3. 目標を達成するための施策・事業

- 『小中外国語教育講座～小中連携を生かした児童生徒の学びの姿について考える～』小中外国語教育講座（府総合教育センター実施）  
【趣旨】  
発達段階に応じた指導方法や小中連携を生かした授業づくりについて学ぶ。  
【概要】  
コミュニケーションを図る資質・能力を育成するため、「児童・生徒に身に付けたい力」を明らかにした上で、どのように授業を展開するのかについて対話を通して考える。デジタル教科書の活用について演習を通して学ぶ。
- 中学校対象『外国語科の学びを深める「ICT×探究的な学び」実証研究事業』（学校教育課実施）  
【趣旨】  
ICTと人ならではの強みを生かし、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な授業モデルを構築し、効果検証とPDCAサイクルを通じて教師の指導力と生徒の学び方の改善を図る。  
「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」、「外部検定試験」等を効果的に分析及び活用し、認知能力及び非認知能力を一体的にはぐくみ、生徒の可能性を最大限に引き出す。  
※中学校を対象に実証研究を行うが、その成果を小学校にも発信し、校種を越えた展開を研究する。

# 令和7年度 京都府 英語教育改善プラン

言語活動の充実を図り、身に付けた知識を十分に活用するための思考力・判断力・表現力を育む授業づくりの推進

## 目標

- 生徒の英語力 R6 53.8% →R7 60.0%      ○言語活動の割合 R5 58.3%→R7 100%  
 ○教師の英語力 R6 48.3% →R7 57%

- 言語活動 指導と評価の一体化 教師の英語力・指導力 校種間連携 ALTの参画 ICTの活用 AIの活用 その他  
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

### 1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①生徒の英語力  
R5 43.2%  
R6 53.8%  
前年度より約10ポイント向上し、成果が見られた。
- ②概要把握を促す授業の実施  
R5 76.0%  
R6 82.7%  
着実な実施の広がりが見られた。

未だ改善が必要な点

- ①教師の英語力  
R5 49.4%  
R6 48.3%  
教師の英語力の向上が停滞している。
- ②即興で英語を用いた活動の有無  
R5 66.5%  
R6 70.4%  
約4ポイントの増加であった。

### 2. 要因分析

- ①多様な研修の積み重ねを通じて、教員の指導方法が改善し、生徒の学びが変化した結果が生徒の英語力につながっていると考える。
  - ②学習のねらいや文脈を意識した指導が浸透し、実施率が向上したと考える。
- ①授業では定型的な表現や簡単な指示にとどまり、語彙や表現を広げる実践が十分に行われていない。この背景には、教師自身の英語力向上への取り組み方に課題があると考えられる。
- ②即興的な活動に対する教員自身の自信や経験の差が、実践への踏み出しを難しくしていたと考える。

### 3. 目標を達成するための施策・事業

『外国語科の学びを深める「ICT×探究的な学び」実証研究事業』（学校教育課実施）

【趣旨】

ICTと人ならではの強みを生かし、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な授業モデルを構築し、効果検証とPDCAサイクルを通じて教師の指導力と生徒の学び方の改善を図る。

【概要】

- ①新たな知識及び技能を習得したり、習得した知識及び技能を活用して思考、判断し、表現するなど、学びを深めていく学習を支援するための道具としてICTを効果的に活用し、生徒の発信力を育む。
  - ②自ら課題を見出し、その課題解決に向けて働きかけていく学習の実現に向け、遠隔機能を活用し、国内外の生徒と探究的に学び合う。
- 『小中外国語教育講座～小中連携を生かした児童・生徒の学びの姿について考える～』小中外国語教育講座（府総合教育センター実施）  
 ・発達段階に応じた指導方法や小中連携を生かした授業づくりについて学ぶ。
- 『中高外国語科教育講座Ⅰ』  
 ～学習評価の在り方とその充実について学ぶ～  
 ・指導と評価の一体化の実現に向けた学習評価の在り方とその充実について学ぶ。
- 『中高外国語科教育講座Ⅱ』  
 ～「伝えたいことがある」授業づくり～  
 ・言語活動を通して「発信する力」を育成するための指導について学ぶ。

# 令和7年度 京都府 英語教育改善プラン

## 目標

4 技能 5 領域を統合した言語活動を通して、目標と指導と評価の一体化を図りながら、総合的に英語力を育成できる各校の中核教員を育成し、長期的な視点で各校の英語教育の充実へとつなげる。

- CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒 (R6 : A2以上55.7%、B1以上17.9% ⇒R7 : A2以上55%以上、B1以上19.5%以上)
- スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合 (R6 : 25.9% ⇒R7 : 100%)

- 言語活動
  - 指導と評価の一体化
  - 教師の英語力・指導力
  - 校種間連携
  - ALTの参画
  - ICTの活用
  - AIの活用
  - その他
- (パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

## 1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ① CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合について、増加がみられた。  
(A2 R5:51%⇒R6:55.7%)  
(B1 R5:13.5%⇒R6:17.9%)
- ② 授業における、生徒の英語による言語活動の割合について、改善の傾向が見られた。  
(R5:31.9%⇒R6:34.6%)

未だ改善が必要な点

- ① スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合について、改善が見られなかった。  
(R5:26.3%⇒R6:29.1%)
- ② 英語担当教員の授業における英語使用状況について、数値の向上は見られなかったものの、依然として改善の余地がある。  
(R5:13.1%⇒R6:16.9%)

## 2. 要因分析

- ① 生徒の英語力向上について  
\*英語担当教員の英語力向上と授業での英語使用割合の改善が要因と考える。  
(\*R5:74%⇒R6:78.4%)
- ② 生徒の英語による言語活動の時間の改善について  
英語教育推進教員育成研修(R5・R6実施)における有識者による講義や研究授業を通じ、参加者が言語活動を具体的にイメージできたことが一因と考える。
- ① パフォーマンステストの実施について  
言語活動を工夫した教科指導は行われているものの、評価の仕組みや計画の整備が十分ではないことが要因と考える。
- ② 授業における英語使用率について  
研修での学びが各校で十分に共有されていないことが一因と考える。

## 3. 目標を達成するための施策・事業

- ①②①② 英語教育推進教員育成研修の実施 (R5～継続)
  - 目標から逆算した単元構想や授業づくりを支援するため、有識者による体系的な指導を受け、言語活動への理解を深める。また、各校で活用できるパフォーマンステストのモデルを構築し、年間指導計画上に位置付ける。研修後には、パフォーマンステストの事例集を高校教育課HPに掲載する予定である。
  - パフォーマンステストの実施を通じて、生徒が自身の学習を振り返り、さらなる英語力向上につなげる。また、教員の指導改善(英語使用状況含む)にも役立てる一助とする。
  - 参加者の授業づくりの力を高めるため、指導主事や参加者同士が助言をしながら、研修参加者全員が研究授業を実施する。これにより、目標と指導と評価の一体化や言語活動を中心とした英語による授業実践についての理解を深め、取り組みを広げる。
  - 年間を通じて活用できるTeamsコミュニティを設置し、参加者同士が情報共有や交流・相談できる場を提供する。これにより、研修で得た学びを府内全域へ広め、各府立高校における言語活動の時間の充実を図る。

### その他 グローバル人材育成に係る取組

- 京都府WWL高校生サミットの実施  
府立高校生が、他県や海外の高校生と遠隔でSDGsに関するトピックについて、英語で議論する場を創出する。
- 各種留学支援事業  
豪州中期留学や短期語学留学に加え、生徒の興味・関心に応じて自ら選択・計画できる「目的別留学支援事業」を推進し、さらなるグローバル人材の育成に努める。



京都府教育委員会

校種	指標内容	2023		2024		2025		2026		2027		
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	47.5	51	52.5	55.7	55		57.5		60		
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	18	13.5	19	17.9	19.5		20		20.5		
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)	100	31.9	100	34.6	100		100		100		
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合(%)	100	26.3	100	29.1	100		100		100		
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	100	100		100		100		100	
		公表(%)	100	100	100		100		100		100	
		達成状況の把握(%)	100	61.5	100		100		100		100	
⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)	62.5	74	75	78.4	77.5		80		82.5			
⑥英語担当教員の授業における英語使用状況(%)	100	13.1	100	16.9	100		100		100			

校種	指標内容	2023		2024		2025		2026		2027		
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	50	43.2	50	53.8	60		60		60		
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)	100	58.3	100		100		100		100		
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合(%)	100	99	100		100		100		100		
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	96.9	100		100		100		100	
		公表(%)	100	55.2	100		100		100		100	
		達成状況の把握(%)	100	59.4	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)	53	49.4	55	48.3	57		60		62		
⑥英語担当教員の授業における英語使用状況(%)	100	52.8	100		100		100		100			

校種	指標内容	2023		2024		2025		2026		2027	
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	80.8	100		100		100		100
		公表(%)	100	35.9	100		100		100		100
		達成状況の把握(%)	100	67.2	100		100		100		100